

自由共産主義インターの考え方について

日本アナキズム運動が華やかだった大正中期頃、ある同志が東大赤門前へパンフを売りにいった処、一人の学生が「ああアナキズムですか、どうもアナキズムには体系がないのですね」⁹⁰と何も買わないで行ってしまったという笑い話がある。これは当時の日本のアナキストにとっては確かに笑い話であった。

何故ならば当時、日本のアナキストの多くは、初期のバクーニンの暴力革命説を信奉して、中期及び後期の彼の思想の変化などに問題にする者すらなかったからだ。

即ち、三十四才のバクーニンが同志のゲオルグ・ヘルベックに「一切の形而上学からの離脱。真理は理論ではなく、行動である」と書き送って、一切の学問的体系を放棄し、二月革命にはバリへ潜入し、四月に再びドイツでポーランド叛乱の機を伺い、四九年一月にはライプビッチに現われ、続いてドレスデン革命で逮捕されるまでの間、いつも彼自ら革命の原動

力だと信じていた労働者の先頭に立ち続けた。この彼の果敢な行動の背景には若い時代に鍛えたヘーゲル及びショーペンハウエルの体系に対する深い研鑽と鋭い批判が先に立っていたのである。

続いて中期七三年、バクーニンは詩人のオガレフに一切の運動から手を引いたこと、国家の発展と財政の独占的傾向は、新しい戦術を必要とする由を書き送り、翌七四年には革命の鬼とも見なされた彼が、エルゼ・ルクリュに「革命は今、寝床に入った」と書き送っている。殊に、後期ロカルフでの臨終の床の中で……我々が個別から出発したのは或いは間違いだっただかも知れない……という意味の言葉を吐いているのは意味深長である。

我々はこの最後の言葉の中で、再び、若いモロセイカ時代（モスコウ学生時代の意）及びツルゲエネフと共に過したベルリン時代における、バクーニンの学問体系への熱中と全く質を同じくした傾向に出あわず。しかも、この最後の言葉は、一切の苦い社会的実践的経験を経た上での言葉だったことを思う時、我々はこれをかなり重要視せねばなるまい。

この問題と関連して、本誌（注・「アナキズム」）十四号所載の重要な論文ガストン・レヴァル「無効になりゆく戦術」を合わせ考慮して見ることは大切であると思う。

レヴァルはスペイン革命を批判して、その革命がバルセロナ、マラガ、ヴァレンシアその他あらゆる処で「共和国官憲」「政党」「農民、商人」「バスクのカトリック」「マドリッドの共和党」らの、反ファッショの「好意」や「勢力」を「利用しなかったら勝つことはで

きなかつた」と断言し、革命には「人道主義者や自由主義者」の「最大多數の男女をそれに結集させねばならない」と結んでいる。

処が、自由共産主義インターのテーゼの中では「一般に人間に訴えることは、自由をよそおう凡てのブルジョア哲学—その実、保守的で反動的である—にアナキズムを浸透させ、アナキズムを漠然たる人道主義に改変させる」と言い、社会理論としてのアナキズムが訴えるのは「被搾取者・プロレタリア・農民にである」と強調し、プロレタリア及び農民のアナキスティックな実践的指導教育活動を通じてのみの革命への勝利を規定している。

いうまでもなく、プロレタリア及び農民が革命の母体であることは勿論であるが、そのアナキスティックな実践的指導教育活動を通じて、それらをスペインにおける程の、素晴らしい革命勢力に発展させたにしても、それだけでは、前述のレヴァルの断言するごとく、革命に勝利を獲ることが絶対に不可能である。革命的に勝利を獲んとすれば、人道的インテリに始まり、商人及びカトリックにまでも及ぶ、殆んどの社会一般の協力をかち獲なければならぬ状態に事態が変化して来ている時、自由共産主義インターの「一般の人間に訴えることは、市民の経済的、社会的条件を度外視して、自由主義者の誤謬と詭弁におちいる」という考え方は、非常に独断的な、これまた、誤謬といわざるを得ない。

かくして、もしアナキズムが前述の如く、一般人間に訴えなければ勝利を獲ることがおぼつかないとすれば、自由共産主義インターが云うところの、アナキズムを社会理論だとする

考え方は迫力が極めて薄い。それは単なる社会学上の、一社会学説にしか過ぎないような印象を多くの人に与える。

従って、そのために自己の生活や、生命までも犠牲にするような勇敢な人を、運動の中に加えることは不可能だ。この事は自由共産主義インターの「社会理論」説をマルクス主義と比較すればすぐにわかることだ。すでに賢明な和田久は、当時ようやく衰え始めた日本アナキズム思想の基底に、唯物弁証法に劣らない哲学体系のないことをひそかに憂えていた(迎島への手紙参照)と思える節がある。僕も近代のマルクス主義の股盛さが、一つにかかって唯物弁証法哲学体系の厳存に由来すると考える。そして、この体系を元にして出てくる階級斗争に、信者達は自己の生活は勿論、生命までもかけ得る段取りになるのは不思議はない。この体系は少なくともブル的観念論では歯が立たない。

ひるがえって自由共産主義インターの、いわゆる社会理論としてのアナキズム階級斗争説が、単にバクーニン以後の現象だけに基礎を置いているのに反して、マルクス主義階級斗争説は、良くも悪くも永遠性を与えられ、ガッチリと歴史の上に馬乗りになっている。即ちマルクスボーイ達はその尻馬に乗って走れるようにできている。

くだいようだが、若し自由共産主義インターが、アナキスティックな階級斗争説をアナキズムの中心理念としたいならば、ちょうど、ブギの後でマンボが流行するように、それを単なる歴史上の一時期に現われた一現象だという見方を改めねばなるまい。人間のおどりたいと

いう生理的願望が永遠性を持つてるように、それに歴史的永遠性を与えねばならない。かくて獲られた史観をゆるぎないものにするためには、当然その史観を基礎づける生命の最も深い奥底から発する、不滅であつて同時に挫折的な哲学体系を、必要とすることを理解しなければなるまい。

リードも言明しているように、我々がマルクス哲学に対抗し得るような、實在論的ならばらしい哲学を打ち立てるまでは、一般大衆を抱え込むことは不可能なようだ。それ故自由共産主義インターが、アナキズムを一社会学論として一切の哲学をよせつけない態度は謬論である。

そして一つの哲学を持つことすら反動だと言わんばかりの反対に、僕は反対である。

従つて「アナキズムには体系がない」という冒頭の一学生の言葉は、今や、単なる笑い話ではすまされないように僕には思われる。

(一九五五)

註記

一九五三年、フランスアナキスト連盟(F A F)が分裂、フランス自由共産主義者連盟(F C L)ができた。それが契機で二つのアナキストインターがつくられ、一九五五年当時その双方から日本のアナ連へ加盟を求めてくるという事態が生じた。△アナキズム▽十八号は、新しく生れたF C Lの回状を訳載紹介したが、この問題を検討する資料として、その年のアナ連大会のために、△世界におけるアナキスト運動の二つの流れ▽を特集した。本稿はそのF C Lの傾向に対する批判としてかかれたものである。